

【旧約聖書日課】サムエル記下 5章1～5節

¹イスラエルの全部族はヘブロンのだビデのもとに来てこう言った。「御覧ください。わたしたちはあなたの骨肉です。²これまで、サウルがわたしたちの王であったときにも、イスラエルの進退の指揮をとっておられたのはあなたでした。主はあなたに仰せになりました。『わが民イスラエルを牧するのはあなただ。あなたがイスラエルの指導者となる』と。」

³イスラエルの長老たちは全員、ヘブロンのだビデのもとに来た。だビデ王はヘブロンで主の御前に彼らと契約を結んだ。長老たちはだビデに油を注ぎ、イスラエルの王とした。

⁴だビデは三十歳で王となり、四十年間王位にあった。⁵七年六か月の間ヘブロンでユダを、三十三年の間エルサレムでイスラエルとユダの全土を統治した。

【使徒書日課】コリントの信徒への手紙一 15章20～28節

²⁰しかし、実際、キリストは死者の中から復活し、眠りについた人たちの初穂となりました。²¹死が一人の人によって来たのだから、死者の復活も一人の人によって来るのです。²²つまり、アダムによってすべての人が死ぬことになったように、キリストによってすべての人が生かされることになるのです。²³ただ、一人一人にそれぞれ順序があります。最初にキリスト、次いで、キリストが来られるときに、キリストに属している人たち、²⁴次いで、世の終わりが来ます。そのとき、キリストはすべての支配、すべての権威や勢力を減ぼし、父である神に国を引き渡されます。²⁵キリストはすべての敵を御自分の足の下に置くまで、国を支配されることになっているからです。²⁶最後の敵として、死が減ぼされます。²⁷「神は、すべてをその足の下に服従させた」からです。すべてが服従させられたと言われるとき、すべてをキリストに服従させた方自身が、それに含まれていないことは、明らかです。²⁸すべてが御子に服従するとき、御子自身も、すべてを御自分に服従させてくださった方に服従されます。神がすべてにおいてすべてとなられるためです。

【福音書日課】ルカによる福音書 23章35～43節

³⁵民衆は立って見つめていた。議員たちも、あざ笑って言った。「他人を救ったのだ。もし神からのメシアで、選ばれた者なら、自分を救うがよい。」

³⁶兵士たちもイエスに近寄り、酸いぶどう酒を突きつけながら侮辱して、³⁷言った。「お前がユダヤ人の王なら、自分を救ってみろ。」³⁸イエスの頭の上には、「これはユダヤ人の王」と書いた札も掲げてあった。

³⁹十字架にかけられていた犯罪人の一人が、イエスをののしった。「お前はメシアではないか。自分自身と我々を救ってみろ。」⁴⁰すると、もう一人の方がたしなめた。「お前は神をも恐れないのか、同じ刑罰を受けているのに。⁴¹我々は、自分のやったことの報いを受けているのだから、当然だ。しかし、この方は何も悪いことをしていない。」⁴²そして、「イエスよ、あなたの御国においでになるときは、わたしを思い出してください」と言った。⁴³するとイエスは、「はっきり言うておくが、あなたは今日わたしと一緒に樂園にいる」と言われた。

《王さま》がいっぱい！【こども説教のために】

伝統的な教会暦の一年一巡りの終わりをしるしづける「終末主日」を迎えました。次週には、新しい一巡りの初め、「待降節」に入ります。

教会暦は、ユダヤ教から受け継いだ祭を用いながら、主イエス・キリストのご生涯とそのお働きを記念するものとして整えられましたが、長い年月をかけて多くの教会が共有できるようにされてきました。

十字架で死なれて三日目にご復活なさった主イエスは、天に昇られたお方として「世の終わり」に再びおいでになられると、弟子たちの教会は教えました。教会暦の終わりに「終末」を記念するときに置かれたのは、この「再臨」信仰によるものです。けれども、最近の多くの教会では、この日のことを「王であるキリストの主日」と呼ぶようになりました。「世の終わり」や「終末」のこと、また「再臨」のことよりも、「わたしたちにとって本当の《王》でいらっしゃるキリストを記念する」ことが、大切なこととされるようになってきたのです。

現代でも世界中に《王》と呼ばれる方々があります。もちろん、《王》だからと言って大きな権力を持つとは限りません。国民から尊敬されているとも限りません。だからこそ、わたしたちは皆、本当の力をお持ちの方は誰か、本当に敬意を向けるべきお方は誰か、と問われています。教会で、わたしたちは、「それはイエス・キリストです」と告白しているのです。

だれが《油を注がれた者=メシア》？

先週、石神井教会の最高齢者が地上のご生涯を終えられました。107歳の方でした。その前の週には、二番目に高齢の方がご生涯の幕を閉じられました。102歳でいらっしやいました。教会で葬儀を執り行わせていただいたのは107歳の方だけでしたが、多くの方が参列くださいました。牧師として葬儀を執り行わせていただきながら、わたしは、終始、神々しい光に照らされている思いを与えられていました。

9月に英国の高齢の女王が亡くなられて葬儀が行われたときには、英国だけでなく世界中の多くの方が、その様子を見守りました。テレビで見て、その荘厳な葬儀に驚かされた方も少なくないでしょう。けれども、その内容は、キリスト教会が通常行う葬儀のおおりででした。式で歌う讃美歌などは、生前の女王が加わって重ねられた準備に従って、女王ご自身の希望されたものが歌われたそうです。

人の生涯は、死によって地上での歩みを終えます。そのとき、残された者は、葬儀を行って、その人の生涯を記念します。その人の命の光を受けとめ、その光に照らされる者として後に続こうとしているのでしょう。その人自身が、その終わりのときに備えながら生き、生涯を終えられるならば、残された者は、もっともよい形でその光を受け継ぐことができるのではないのでしょうか。

「旧約聖書」の伝える歴史の中で、400年にわたって存続したというユダ王国は、ダビデが王に即位したことから始まりました。彼から始まるダビデ王家が400年間、王位を継承したのです。このダビデは、サウルが王であった国を引き継ぐ形で、王として即位しました。まず、彼自身の属するユダ族の王となり、次いで、サウルの王家のもとにあったイスラエル王国の王も兼ねることになりました。旧約聖書日課は、その事情を伝えているのです。

ダビデは、このとき、王位に就く儀式として、イスラエルの長老たちから油を注がれました。ユダの人々からは、すでに油を注がれていました（サム下2:4）。ダビデは、少年時代に預言者サムエルから油を注がれる儀式を受けていたとも描かれていますから（サム上16:13）、長老たちや人々が油を注いだというのは、それを追認したということなのでしょう。だからと言って、それが余計なことだということにはなりません。預言者を通して神がお選びになられた者であったとしても、それを人が認め、受け入れ、その力に服し、敬意を向けるということがなければ、無駄になってしまうのです。

弟子たちの教会は、十字架の上で死なれた方を、「キリスト」すなわち「メシア=油注がれた者」とお呼びしました。その死をもって沈黙することもできましたが、弟子たちの教会は、「この方こそメシアだ」と告白したのです。

「わたしを思い出してください」

11月の初めに「聖徒の日」を置く諸教会の中に、この月全体を「死者の月」として記念する教会があります。

「終末」におけるキリストの「再臨」を強調するにしろ、キリストの「王」としての位置づけを強調するにしろ、わたしたちが見ているのは、間違いなく「十字架で死んだキリスト」です。その生涯でなされたお働きや教えも貴重なものですが、その生前だけを見て、その功績だけを見て、主イエスを「キリスト」とお呼びするわけではありません。むしろ、その生前のお働きや教え、その功績をすべて否定されるような十字架刑で死なれたことを見て、教会は、このお方を「キリスト」とお呼びしてきたのです。「油注がれたお方＝メシア」と、あのダビデ王以来の呼称を用いて、お呼びしてきました。

もちろん、わたしたち地上の営みを続けている者にとって、主イエスの生前のお働きや教え、その功績が、何よりも生きていく上での指針となるのは、間違いありません。

それでも、わたしたちは皆、この地上での営みを終わるときを必ず迎えます。生涯に為し得たことが多くても、少なくても、地上に生を受けた者として、必ずその歩みの終わりの日を迎え、「死」の刻印を押されます。

そうであればこそ、わたしたちは、その一人ひとりの人の「死」を記念してきたのです。葬儀を通して、記念礼拝を通して、いいえ、主日ごとの礼拝やあらゆる教会の営みを通して、わたしたちは、知り得る限りの「死者」の記念をし、わたしたち自身がいずれ迎える「死」をもあらかじめ記念しているのです。それどころか、わたしたちは、地上を生きるすべての者をも、「死」に行く者として互いに記念し合っているとと言ってもよいのです。

先週、たまたまあらかじめお約束していて、一人の方のお宅をお訪ねしました。いまや教会で最高齢のお二人となった98歳の方の内のお一人です。若かりし頃の教会生活のことをうかがい、讃美歌を共に歌い、聖書を読み、祈りに心合わせる、幸いなひとときを過ごさせていただきました。

「あなたの御国においでになるときには、わたしを思い出してください」と十字架上の主イエスに願ったのは、隣の十字架につけられた犯罪人でした。死に行く者が、死に行く者に、「わたしを思い出してください」、「わたしを記念してください」と願ったのです。

これが、わたしたちキリストの教えに従う者の生きる道です。十字架の上で、このお方は神々しく光り輝いています。死に行く者として。死に行く者と共にいるお方として。このお方に、そして、このお方と共にいる者に、わたしたちは、命の力を認め、まことの敬意を向けずにはられません。